

2018年度 研究センター事業報告書

研究センター名	間文化現象学研究センター
---------	--------------

I. 研究成果の概要

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこなうだけでわかりやすく記述してください。

2018年度の主な活動

「間文化現象学研究センターは、グローバル化する世界のなかで起こる文化と文化の摩擦・混濁などの事態の構造を、現象学の観点から解明している。これまで科研費プロジェクトと連携して、毎年の重点研究テーマを設定し、研究を蓄積してきた。2018年度はその最終年度であり、ワークショップ「間文化性と宗教」を開催した(2019年3月)。朝日新聞に情報が掲載され、多くの聴講者を集めた。同ワークショップをはじめとした5年間の共同研究の成果をもとに、次期研究センターの設立に向けての構想を得ることができた。

2018年度の主な研究成果発信

そして主要メンバーが翻訳し2017年度刊行した『うつむく眼』の著者マーティン・ジェイ氏を招いた同年度シンポジウムの記録を「立命館大学人文科学研究所紀要」118号(2019年2月)において英文で刊行した。同シンポジウムの記録は、現代思想における「視覚」と「間文化性」の関係を考えるうえで重要なものであり、マーティン・ジェイ氏による講演も含めて英語圏の研究者に同研究センターの成果を発信する機会となった。

またメンバーの亀井大輔氏が著書『デリダ 歴史の思考』を法政大学出版局より刊行した(2019年1月)

2018年度の主な社会的発信と貢献

また「土曜講座」2018年9月「現代哲学の名著を読む」を企画し、メンバーが講師を担当した。このことにより、研究成果の社会的発信と貢献ができた。

2018年度の若手研究者の支援・育成

また、若手研究者の研究渡航、学会参加などを支援した。若手研究者については2018年度、本研究プロジェクトより三名の若手研究者が博士学位を取得し、それぞれ2019年度より衣笠総合研究機構「専任研究員」「初任研究員」に採用された。本研究センターの活動を通じて、着実に若手研究者を育成してきた成果が実った。

2018年度の研究活動の意義

2018年度は科研費プロジェクトの最終年度であったが、シンポジウム「間文化性と宗教」は宗教を通じての間文化性の哲学の考察を主題とし、これまでの研究に対して、宗教経験についての現象学的考察という点で、新境地を開くものであった。本研究センターは2019年度に次期センターへの移行準備を名目に延長を認められたが、次期センターの構想・準備にとって、有益な示唆を含むものであった。今後の活動への展開にとって大きな意義があったと言える。また、現代社会における「間文化性と宗教」という課題はきわめて今日的なものであり、今後も何らかの形で展開することが求められているものと思われる。

II. 拠点構成員の一覧

本欄には、2019年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員(PD・RPD)

役割	氏名	所属	職位	
センター長	谷 徹	文学部	教授	
運営委員	北尾宏之	文学部	教授	
	伊勢俊彦	文学部	教授	
	加國尚志	文学部	教授	
	林 芳紀	文学部	准教授	
	亀井大輔	文学部	准教授	
学内教員 (専任教員、研究系教員等)				
学内の若手研究者	専門研究員・研究員			
	補助研究員・リサーチアシスタント			
	大学院生	松田智裕	文学研究科	博士課程後期課程
		横田祐美子	文学研究科	博士課程後期課程
		有村直輝	文学研究科	博士課程後期課程
		榊川耕平	文学研究科	博士課程後期課程
		酒井麻依子	文学研究科	博士課程後期課程
学振特別研究員 (PD・RPD)	鈴木崇志	衣笠総合研究機構	学振PD	
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・ 博士前期課程院生等)	神田大輔	文学部	非常勤講師 客員協力研究員	
	青柳雅文	文学部	非常勤講師 客員協力研究員	
	小林琢自	文学部	非常勤講師 客員協力研究員	
	田邊正俊	文学部	非常勤講師 客員協力研究員	
客員協力研究員				
その他の学外者 (他大学教員・若手研究者等)	池田裕輔	東京大学人文社会系研究科	特別研究員	
	佐藤 勇一	福井工業高等専門学校	准教授	
	黒岡 佳柁	福州大学(中華人民共和国)	副教授	
研究所・センター構成員	計 19 名	(うち学内の若手研究者 計 6 名)		

III. 研究業績

本欄には、「II. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2019年3月31日時点)

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	亀井大輔	デリダ 歴史の思考	単著	2019年4月	法政大学出版局		総頁数 276 頁

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	Daisuke Kamei	Martin Jay and Jacques Derrida – After Downcast Eyes	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.49-54	有
2	Masatoshi Tanabe	Between Ocularcentralism and Anti-ocularcentralism : Nietzsche's Concept of Vision	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.55-62	有
3	Yuichi Sato	Some Secret involuntary Encounters : A quarter century after Downcast Eyes.	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.63-73	有
4	Masafumi Aoyagi	Constellation and Vision – Motives of Vision in Adorno Philosophy	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.29-36	有
5	Daisuke Kanda	The “See” and “Motivation” Concepts in Husserl's Phenomenology.	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.37-48	有
6	神田大輔	フッサール現象学における「煮る」ことと動機づけ	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.105-114	有
7	青柳雅文	星座と視覚-アドルノにおける視覚をめぐる	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.115-128	有
8	亀井大輔	マーティン・ジェイとジャック・デリダ 『うつむく眼』の後で	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.129-139	有
9	田邊正俊	「反視覚中心主義」と「視覚中心主義」の“あいだ”で—『うつむく眼』を手がかりとしたニーチェ思想をめぐる一考察	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.139-152	有
10	佐藤勇一	いくつかの密かで非意図的な出会い—『うつむく眼』から四半世紀	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.153-165	有
11	横田祐美子	実存とその表現をめぐる問い—ジョルジュ・バタイユにおける実存主義と生の言語について	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.171-190	有
12	黒岡佳柁	「存在の思考」と間文化性への試論	単著	2019年2月	立命館大学人文科学研究所, 立命館人文科学研究, 118号		pp.237-256	有

13	谷徹	「私は思考しうるか？」	単著	2019年1月	河合文化教育研究所	木村敏・野家啓一編	pp.149-181	無
14	Toru Tani	“Know Thyself, On Possibility of a Medial Phenomenology”	単著	2019年3月	<i>Lebendigkeit der Phänomenologie - Tradition und Erneuerung, Vitality of Phenomenology - Tradition and Renewal</i>	Giovanni Jan Guibilato 編	pp. 104-117	無

3. 研究発表等

No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	Takashi Kakuni	Not Touching Him. Merleau-Ponty Around Derrida's Lecture of Merleau-Ponty	2018年4月	Symposium on “Phenomenology and “Post-“Structuralism, Chinese University of Hong Kong	
2	加國尚志	錯綜体、潜在性—市川浩身体論再読	2018年9月	日仏哲学会プレ・イベント企画「見果てぬ哲学」 明治大学	
3	谷 徹	「身体、媒体、あいだ」	2018年9月	“移し渉り：Übergänge, Transitions“, 4th Conference of the European Network of Japanese Philosophy, Universität Hildesheim	
4	Daisuke Kamei	Derrida and 'Philosophy of Life'	2018年5月	6th Derrida Today Conference 2018 Montreal University (カナダ)	
5	Daisuke Kamei	Inheritance of Deconstruction: the Question of Language 1964-1965	2018年6月	Forefronts – Derrida, Sofia University(ブルガリア),	

4. 主催したシンポジウム・研究会等

No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	ワークショップ「間文化性と宗教」	衣笠キャンパス	2019年3月	30名	

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）

No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	神田大輔	フッサール『ヨーロッパ諸学の危機』を読む	土曜講座 衣笠キャンパス	2018年9月
2	小田切建太郎	ハイデガー『存在と時間』を読む	土曜講座 衣笠キャンパス	2018年9月
3	林芳紀	ロールズ『正義論』を読む	土曜講座 衣笠キャンパス	2018年9月
4	加國尚志	「メルロ＝ポンティとフランス現代思想」	2018年度初春講座 日独文化研究所	2018年2月～3月
5	加國尚志	「身体の哲学と西洋哲学史」	2018年度初夏講座 日独文化研究所	2018年5月～7月

6. 受賞学術賞

No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
該当なし					

7. 科学研究費助成事業

No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	加國尚志	「間文化性の理論的・実践的探求-間文化現象学の新展開」	科学研究費基盤研究(B)	2014年4月	2019年3月	研究代表
2	伊勢俊彦	私が入らんとともに住み、行動する世界の構成と自己の外部への依存の哲学的研究	科学研究費基盤研究(C)	2016年4月	2018年3月	研究代表

3	青柳雅文	アドルノの亡命期間における現象学研究の解明	科学研究費基盤研究(C)	2017年4月	2019年3月	研究代表
4	小林琢自	尾高朝雄の“現象学的”国家論における「全体」概念について	科学研究費基盤研究(C)	2017年4月	2019年3月	研究代表

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
該当なし						

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録(特許)番号	国
該当なし								